

第1章 イギリス・ジェネラルバプテスト（1660年まで） （続き）

フェンスタントンの教会

フェンスタントンの教会とヘンリー・デンの間の交わりの様子は決して、そして確かにはっきりとは把握できなかった。たくさんのリストに彼の名前は出てくるものの、牧師としての肩書きの記載は一切ない。デンは、教会に在籍している他の古い会員たちと同じように、教会の誤りを指摘し、正す役割を果たしてはいたものの、日常のリーダーシップは二人の長老（牧師）に委ねていた。デンは二つの事柄に関して大きな主導権を振るった。まず、1653年の10月、教会に対して福音宣教のより大きな責任を促し、その月の終わりに彼自身が「イエス・キリストの福音をより広く伝える宣教者として教会から任命され、按手」されていた。11月3日にはひとりの教会員を伴って10日間の伝道旅行に出かけ、個人伝道、ケンブリッジの教区教会での説教、複数の家の教会の訪問、遠方に散っている会員の戸別訪問を行なっている。それから間もなく、おそらく彼と面識のあった人物からの問い合わせの結果であったと思われるが、彼とフェンスタントンの幾人かの教会員は、当時話題となっていた問題について教義的な見解を公にするように依頼を受けた。ここにその内容を記そう。それらは、キリストの死は万人のためか否か、信仰者のバプテスマについて、人間の罪は神の創造に起因するか否か、神の定めた礼典はいまだ有効か否か、信仰者は恵みから漏れることがあるかどうか、というテーマであった。

二番目の主導権は、同月11月に発揮された。その時ヘンリー・デンは健康を崩していたため、彼に代わって息子のジョン・デンが教会に次のような報告を行った。それによれば、最近、父親がカンタベリーで、教会組織に至っていない「路頭に迷っていた」信者の群れからそこにとどまるように懇願されたというのである。その懇願に対してヘンリー・デンは、これは「彼が教会籍を持つ教会がどう考えるかの問題である」と返答した。フェンスタントンの教会は細心の注意を払って、カンタベリーの教会が依然としてデンの助けを望んでいるかどうか、デンの派遣を照会する自分たちの手紙を熱い思いで受け取るかどうかを見極めるために手紙を書いた。その結果、フェンスタントンの教会は、それほど乗り気ではなかったもののデンの派遣を決め、急いで彼を任命し、協力者1名とカンタベリーまでの旅に必要な費用と馬を準備した。フェンスタントンの手紙は「神の教会からカンタベリー近隣の教会へ」で始まり、来年2月に教会が正式に組織されるであろうこと、その教会の牧師としてデンが最適であることを明らかに、しかし仄めかすように書かれていた。先方によれば、デンは「家一軒を与えられ、我々の間で快適で満足に暮らしたことは疑いの余地はない」のだった³⁵。これを以ってデンはフェンスタントンの教会への報告としたのだ。トマス・クロスビーによれば、デンはこれ以外

³⁵RCC, 71-3, 83f, 101f, 105-8, 109, 111-13, 114, 134f.

にもカルビン主義バプテストと共に『簡素なる弁明（*The humble apology*）』（1660）と銘打った3つの小冊子を出版したが、その後、間もなく亡くなった³⁶。

しかし、フェンスタントンの記録は、ヘンリー・デンの生涯についてそれよりはるかに詳しく伝えている。最初の方では、デンが、様々な原因のために結局教会を去って行った長老や会員を訪問したことについて多くの紙面を割いている。しかしその多くのケースは、その人たちが聖霊の直接的で実際的な働きを経験したためであって、これまでのように聖書、祈り、説教、パン裂き、バプテスマ、按手といった教会の伝統的な礼典に依拠することなしに聖霊の働きを体験したためであった。フェンスタントンの長老たち（牧師）は、「それは危険で、聖書を軽んじ、人間の内的なひらめきに頼るのは安全ではなく、往々にして間違いであり、非常に疑わしい」と警告するのが常であった。しかしそれらの人々は、教会の礼典の価値をまったく否定したわけでもなかった。ある女性は、「経験から、神は教会の礼典において働かれることもあれば、それ以外の仕方でも働かれることもある」と述べた。しかし、彼らが切望したのは、「目に見える外的な儀式や肉体的な礼典」から自由になることだった。他の女性は、「私は神のものであり、神は私の神であり、その神は聖霊によって働かれることを私の魂にあきらかにする。そのような神の摂理のないところで、私は歩むことはできない」とも述べた。アンソニー・ユール（Anthony Yeule）は、「再洗礼派」は聖書の教えるところに最も近く歩んだであろうが、彼らとは歩みを共にしたくないと公言した。他の人々と同じように彼もまた、「聖書の言葉に反することを語る霊は真実の霊ではなく、あなたがたを導いている霊は聖書に反している。したがってそれは真実の霊ではない」と聞かされていたのである。そのような意見は（17世紀の聖霊派たちのそれであったが）、クェーカー派が生まれる温床であった。しかし、フェンスタントンの記録によれば、1655年の1月にチャタリス（Chatteris）で実際にクェーカー派と遭遇するまでは、彼らがクェーカー派とみなされることはなかったとある³⁷。

すでに述べたように、すべてのジェネラル・バプテストが漸しくバプテスマを受ける者の頭に手を置く按手を行っていた訳ではなかった。そればかりか、フェンスタントンの教会で広く受け入れられていたそれ以外の2つの行為（洗足と主の晩餐の前に行う愛さん）についても一枚岩ではなかった。愛さんの後に行う主の晩餐の執行については、1653年1月にケンブリッジで開かれた大会において、その地域の教会の長老（役員）、牧師、会員の間で意見が戦わされた。その際、今後、交わりにある全教会は、愛さんが終わった後に主の晩餐を執り行うことを決定した。その後9月、フェンスタントンの教会は、そのように行う理由について他の教会から質問を受けた。それに対してフェンスタントンは、新約聖書が明確に手本を示しており、遠路から足を運ぶ教会員に主の晩餐に先立って食物を振る舞うのは必要なことであると答えた。だからと言って、それを「主の命令として教会に求める」ことはないとも述べた。しかしながら、ヘンリー・デンの教会はこの問題に緩い態度をとったため、教会員の離脱が起り、他の教会に身を寄せる者も出てきた³⁸。

³⁶Crosby, I, 306f.

³⁷RCC, 5f, 21, 33, 41, 49, 115.

³⁸*ibid.*, 36f, 69f, 135-7.

フェンスタントンは（1651年告白にあるように）、自分たちの教会の経済的に困窮している教会員を支えるだけでなく、必要な時には、特別の必要を求める他教会の教会員も支えることを表明した。しかしこれは濫用される危険があるので、フェンスタントンはそういう場合のルールを作成を行った。援助を求める者は、教会か執事に自分の置かれている状況を説明せねばならず、執事は少なくとも2～3名の会衆の同意を得た上で（できれば長老1名の同意もあった方がよい）支援を与えるべきであるとした。教会員たちは、自分たちの近親者がこのような教会全体に関わる事柄に責任を問われることを全力で退けようとした。さらに、もしフェンスタントンは、自分たちの教会員が他の教会の援助を受ける必要が出てきた時、その本人ではなく、教会が信頼する誠実な人物を先方の教会に送るべきだとした。それによって、その人物は先方の教会の援助を受け取り、自分の教会に持ち帰るのだった。また、フェンスタントンは、自分への援助を求める他教会のいかなる教会員に対して、その人に直接援助を与えないとした。実際、このような教会員に対しては、「その人物のために教会が最大の力を払って、必要最低限の生活を営むためのあらゆる正当な方法を採用するまでは」支援を与えないようにした。これらの取り決めに則って、1658年にケンブリッジシャ・ダリングハム（Dullingham）教会の会員は支援を受けたが、それ以前の1655年と1657年に支援を申し出た2人は拒まれた³⁹。

フェンスタントンの教会が被った災難は、教会員のジョン・ウィルソン（John Wilson）が1654年秋に起こした事件であった。それがその対応の典型的な例であった。ウィルソンは火事で家屋、野外トイレ、穀物、干し草を失ったため、損失補填の募金のために地域の複数の裁判所へ出向くべきか、それともそれらの裁判所から地域住民に向けてその旨の書簡を書いてもらうべきかについて、教会に相談した。その結論を出す前に、教会は「彼が借りていた家を除く」損失額がおおよそ30ポンドであることを知った。何度も話し合った結果、教会は外部の組織にこの件を訴え出ることをせず、「交わりのある教会だけに知らせて」助けを求めることにした。回覧文書は、この件の話し合いのために、12月8日にケンブリッジのアーサー・ヒンデス（Arthur Hindes）宅で行われる総会に各教会から2名の代表を送り出すように求めた。これは、教会毎ではなく、ヒンデス個人を通して個人献金を募ることを決めたためである。フェンスタントンは6ポンドの献金を約束したが、ケンブリッジの会議は、ウィルソンが火事で焼け落ちた建物に関して貸主と合意に至るまでは教会からの献金を送らないとヒンデスに伝えた。それで生じる損失まで支払いたくなかったからである⁴⁰。

マーガレット・スパフォード（Margaret Spufford）は、17世紀のケンブリッジシャの非国教派の村人が被った故郷での疎外体験を書いたが、それはその村だけのことではなく、当時、地域一帯のあらゆる場所でそうであったことを明らかにした。その問題は、すべてのジェネラル・バプテストの指導者がイングランド国教会を偽りの教会としてそこから完全に分離することを求めたという動かざる事実によって先鋭化された。そしてこの事柄の必然的な結果が、様々な形で影響を生じさせた。そのうちの1つは、教区教会を介さず、自らが婚姻記録や出生記録を保管するということであった。また、自分たちの教会における親密で内実のある交わりの必要も説かれた。もしそれを持たなければ、ジェ

³⁹ *ibid.*, 16-19, 167f, 221-3, 238-40.

⁴⁰ *ibid.*, 103-5, 108f.

スパー・ドクロー（Jesper Docrow）のように、孤独に打ちひしがれた結果、再び教区教会へ戻ってしまふことがあったからである。また、もしバプテスト教会でバプテスマを受けると、それによって経済的困窮が襲ってくることを心配する者も出てきた。小作農であった者は、もし地主が自分のバプテスマを聞きつけると自分を放り出すと信じていたからである。頭の回転が早く、責任感のかけらもないジョン・ブロウズ（John Blowes）さえ（彼が創設に関わったサッカーチームの試合のために祈り会を欠席するような人物であった）、教会につながることで近所の人々による仲間外れを解消しようとした。他方、教会が世俗から分離を切望するのは、教会が経済的に貧しい教会員の面倒をみるという動機のためであり、その対象となるメアリー・ウィトック（Mary Whittock）とその幼い子供が教区の世話にならないことを地域に向かって明らかにするためであった。同時に、ジョン・デンが教会に、不従順で怠慢な彼の使用人（この人物も教会であった）エリザベス・ノーブル（Elizabeth Noble）の譴責を要望した時のように、教会内部で更なる世俗的な事件が生ずる可能性があった。最もそのケースでは、教会の叱責が彼女を悔い改めに導きはしたが、彼女の父親も同じ教会の教会員であったため、しばらくの間、問題は燻った。教会員への地域の評判に対する教会の懸念は、悪名高い喧嘩で評判となったトマス・グリーン（Thomas Green）とその妻に対する譴責で明らかになった。この問題は、グリーンが自分の娘を家に留め置き、娘を怠惰に任せ、些細な盗みを進んで容認したことに原因があるとされた。教会はこの夫婦に「娘を奉公に出すように」強く勧めた⁴¹。

（続く）

⁴¹M. Spufford, *Contrasting Communities*, 1974, 364f. See *RCC* 19, 82f, 244f, 110f, 207, 210f.